

コラム集

『出雲国風土記』と松江の歴史ー コラム1

地質学から見た
『くにびき神話』

野村 律夫

【表紙写真】 (稲佐の浜) から佐比賣山 (三瓶山) を望む

1

本コラムは、松江市が2026年3月に公開した、「『出雲国風土記』と松江の歴史」を構成するコラム集の第1編です。

2

著者は島根大学／島根半島・宍道湖中海ジオパーク・専門員、野村律夫さんです。

3

本文内の写真の撮影と図版の作成は、著者の野村律夫さんによります。

4

「『出雲国風土記』と松江の歴史」は次頁の9編を公開しています。本編と一緒に、是非ご覧ください。

〈 公開中 〉

A 本文編 (全5章)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147298>

B 詳細解説編

1 『出雲国風土記』と松江の山と野 詳説

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147302>

C エッセイ集

1 『出雲国風土記』の郷の伝承 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147303>

2 『出雲国風土記』の山 登頂記 —「風土記の山」の風景と魅力— [三代 隆司]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147304>

3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光 〈松江市編〉 [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147305>

D コラム集

本編

1 地質学からみた『くにびき神話』 [野村 律夫]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147306>

2 『出雲国風土記』の布自枳美高山・女嵩山と嵩山・和久羅山

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147307>

3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147308>

E 読下し編

(松江市部分 巻首・意宇部・島根郡・秋鹿部・巻末の一部)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147309>

目次

■ 地質学からみた「国引き神話」	001
■ 島根半島の地形の特徴	003
■ 島根半島の地質の特徴	004
■ 縫い付けた場所の地質	006
■ 切り裂いた場所の地形地質	007
■ 土地を引っ張った綱の地質	009
■ 古代史にみる主な国引き神話の解釈	011
■ 環日本海交流がもたらした 日本海の地理的広がり	012
■ 発想の原点から国作り構想へ	013
■ 時空をつなぐ人々の自然観	014
〈コラム〉 日本列島の動的形成の復元	015
出雲国風土記意宇郡の国引き神話（詞章）	016

■地質学からみた「国引き神話」

西暦733年につくられた出雲地方の地誌、いわゆる出雲国風土記に意宇（おう）郡（今の松江市の一部と安来市）の地名の由来を記す文章がある。これによると、島根半島は日本海に面した朝鮮半島の新羅（しらぎ）の三崎や能登半島北東端の珠洲（すず）の三崎などから引き裂いた土地を綱で引っ張り縫い付けられたという。これが古来より歴史や神話の研究者によって注目されてきた、いわゆる「国引き神話」である。その文体は読んで聞かせるような詩歌でもあり「国引き詞章」とも呼ばれている（P.16 国引き神話「詞章」資料）。

この文章の解釈は、研究者によって大きく異なっている。それは後に述べるとして、私たちがのような地質学を専門とする立場からは、動的な大地の語りが興味深い。それは、この神話の舞台となっている島根半島が、褶曲（しゅうきよく）や断層の多い「宍道褶曲帯（しんじしゅうきよくたい）」と呼ばれている所で、土地を綱で引く様子、すなわち土地の水平移動が現在の地球科学にある大地の移動論と見かけのうえで視点が共通しているからである。

現在のプレートテクトニクスの理論が生まれる原点となった大陸移動説は、1912年にウエゲナーが科学的根拠をあげながら唱えた。しかし、国引き神話には特段の科学性があるわけでもない。単なる巨人伝説のような話でもある（図1）。しかし、わざわざ遠方の地名を挙げ、神話を語った理由を考えると、そこには古代の人々の今の科学へ通じる自然観がこの神話の背景にひそんでいるのではないかと気づく。どのような根拠のもとに4つの土地を引き付け、そして縫い付けた



図1. 出雲市大社町にある道の駅で緑広場前の「国引き神話」のレリーフ

のだろうか。重要なのは、地図もない1300年も前の古代の出雲の人々が、あたかも日本海周辺の陸海を俯瞰して島根半島の形成に関わる特徴的な地形に気づいていたことである。

■鳥根半島の地形の特徴

鳥根半島は東西にわたって細長い形をしている。直線距離で約67kmもあるが、南北で見ると、狭いところはわずか3kmほどしかない。図2で示す半島の形を鳥瞰的に見ると、地塊の連なりが不連続になり、海岸線もくびれている所が目につく。このような地形は、歌川広重の木版画にある雁（かり）が群れをなして飛んでいる形に似ている（図2の右）。地質学では雁行（がんこう）配列といい、地殻が大規模な変形運動を受けた場所の説明に使う。鳥根半島の山々を穴道湖や中海のある低地帯側から眺めると、稜線が東西にわたって上がり下がりを繰り返しながら連続する。大きく窪む部分は上述した地塊が不連続になっている部分である（図3）。出雲国風土記では、このような地形を折絶（おりたえ）と呼んで、それぞれ西より「去豆（こづ）の折絶」、「多久（たく）の折絶」、「宇波（うなみ）の折絶」を認め、4つの国の境とした。

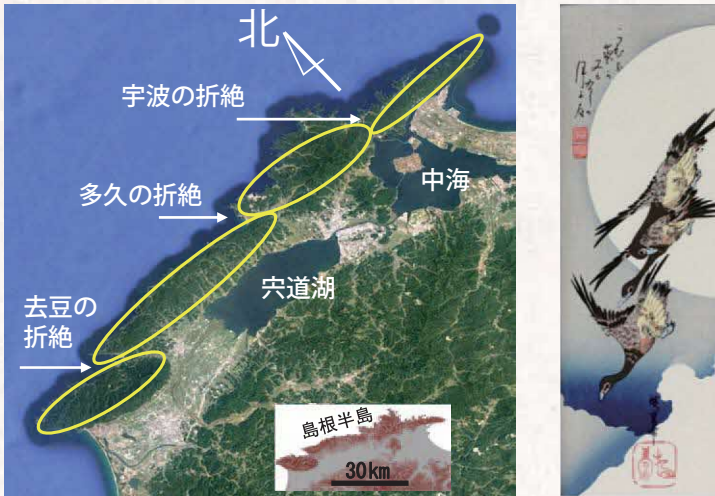


図2. 鳥根半島の地塊の配置は鳥が群れをなして飛んでいるときに似ている
背景写真は Google Map による



図3. 地塊の窪み 穴道湖岸からみた去豆の折絶（左）多久の折絶（中）中海湖岸からみた宇波の折絶（右）

■ 島根半島の地質の特徴

雁行配列した島根半島の地質は、新第三紀中新世の初期から後期にかけての火山岩や堆積岩でできている(図4)。これらの地層を日本列島が形成された順(図5)に見ていこう。

【図5-A】 約2000万年～1800万年前には日本列島は大陸の縁にあり、大陸の間には巨大な細長い湖沼域が形成されていた。そして、やがて汽水湖へと変わっていく。美保関地域に広く分布する砂岩層がこの時のもので、温暖な気候下で生息していた動植物の化石が見つかる(図4の黄色)。

【図5-B】 1800万年～1600万年前には日本海の拡大にともなって日本列島は大陸から離れるように移動した。島根半島域では深海で堆積した黒色泥岩が広く分布するようになり(図4の青色)、また同時に流紋岩の海底火山活動も活発であった(図4のピンク色)。

【図5-C】 約1500万年～1300万年前になると、西南日本列島はほぼ現在の位置になり移動が停止した。この移動の停止は、中国山地一帯の陸化をもたらし、陸源性の土砂が深海のなかにあった島根半島側に流れ込むようになった。出雲市の十六島(うっぷるい)から小伊津(こいづ)海岸や松江市の須々海(すすみ)海岸の地層はこの時のもので、砂岩層と泥岩層がリズミカルにくり返す砂岩泥岩互層がつくられた(図4の黄土色)。

1100万年前頃になると、松江市街周辺に分布する浅海性の砂岩(図4の黄緑色)を最後として島根半島一帯は陸化する。島根半島に宍道褶曲帯と呼ばれるような褶曲や断層が形成されたのは、1500万年前以降の地殻変動にはじまっている。半島の東側には宍道断層、西側には大社断層が形成されており、南北方向から半島に大きな力が加わったことが示唆される(図6)。

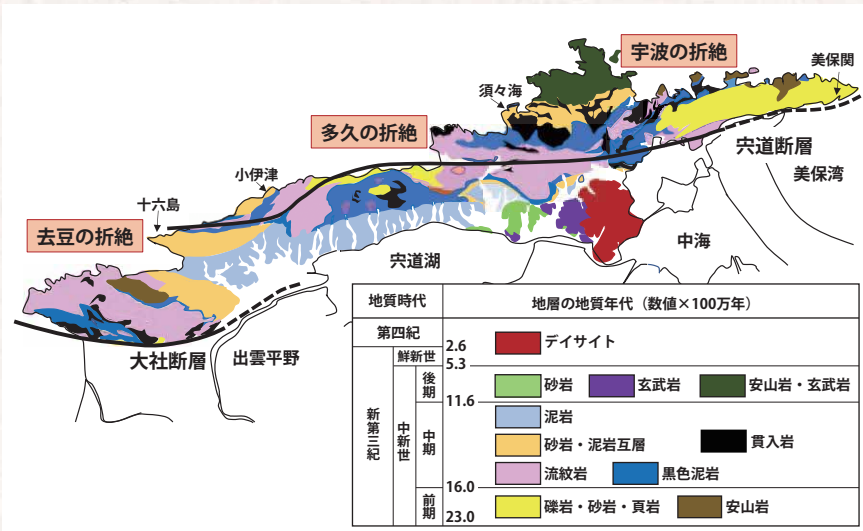


図4. 島根半島の地質と主要な断層

地質図表示システム 地質図 Navi (産総研地質調査総合センター <https://gbank.gsj.jp/geonavi/>) による

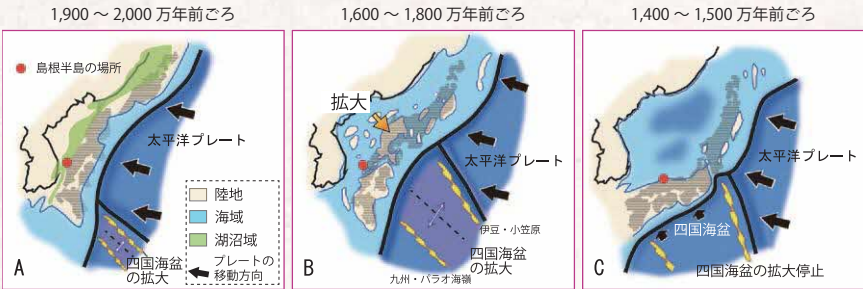


図5. 日本列島の形成過程 (A-C) と現在のプレートの動き (D)



図6. 紙粘土で作った島根半島の褶曲形成モデル (野村2025より引用)

■縫い付けた場所の地質

ここからは国引き神話のキーワードである「折絶」について地質学的にみてみたい。古代史研究者は、平野（2016）が指摘するように、国引き神話を解釈するうえで重要な視点がこの言葉にあると考えている。一般的に折絶は水平に持った紙を下方へ折り曲げることで水平的な連続性がなくなることの意味する。

どうして、このような地形ができたのだろうか、図4の地質図と一緒に図7を見てみよう。先に述べたように、島根半島には南北方向の力を受けて半島全体が陸化するようになった。「去豆の折絶」は、大規模な褶曲作用を受けて地層が凹んだところである。十六島湾を挟んで同じ砂岩泥岩層が、北側は南に傾斜し、南側は北に傾斜をしている。「多久の折絶」は東西に延びる宍道断層によって山地が南北に分断され、その部分が侵食されて断層線谷ができたところである。しかも分断されて南北に狭くなった山地は、さらに侵食されたために宍道湖や日本海につながる谷になり、全体としてみるとT字状の窪地になった。「宇波の折絶」は、半島東部の砂岩層と泥岩層が接するところで、硬質な砂岩に対して風化作用に弱い泥岩が侵食を受けて窪む地形となった。折絶は島根半島の地質地形を表象的に語っている所といえる。古代の人々がこのような地形を地質学的に理解していたとは言いがたいが、古代史研究者が指摘するようにたいへん気になる景観であったに違いない。

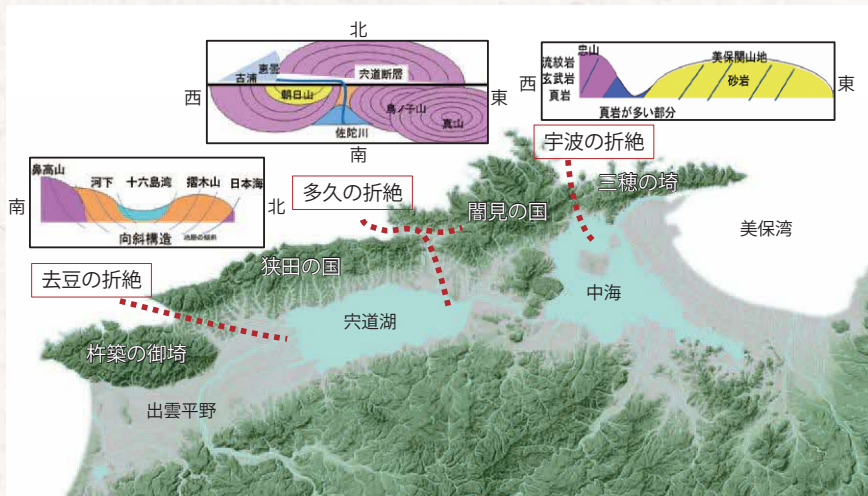


図7. 縫い付けられた土地（折絶）の地質構造 地層の凡例は図4を参照

■切り裂いた場所の地形地質

余りある国の三埼から切り裂いた「新羅の三埼」、「北門（きたど）の佐伎（さき）の国」、「北門の良波（よなみ）の国」、そして「高志（こし）の都都（つつ）の三埼」の4箇所は、どこにあったのだろう。「国来（くにこ）、国来」（国引き神話「詞章」資料）と引いて来て縫いつけた国は「杵築（きづき）の御埼」、「狭田（さだ）の国」、「闇見（くらみ）の国」、そして「三穂（みほ）の埼」である。

「新羅の三埼」については、江戸時代からの研究で新羅の東南方で海へつき出た所と理解されている。一般に、「埼」は海洋に向けて突出している地形のことを意味している。朝鮮半島の南東側で、突出しているような地形を見つければ、虎尾串（ホミゴツ）や九龍浦（グリョンポ）が目につく。島根半島の西端の地塊に相当する大きさの地形だ。迎日湾（ヨンイルわん）側は島根半島のような急崖のある岩石海岸になっているが、虎尾串の日本海側には発達した海岸段丘あり、島根半島にはない景観をしている。一方地質で見ると、古生代・中生代の地層が広く分布している朝鮮半島のなかで、韓国南東部の浦項（ポハン）から蔚山（ウルサン）の日本海側に限って島根半島と似た地質時代の堆積岩と火山岩からなる地層が分布している（図8）。そんな場所に新羅時代の外港であった蔚

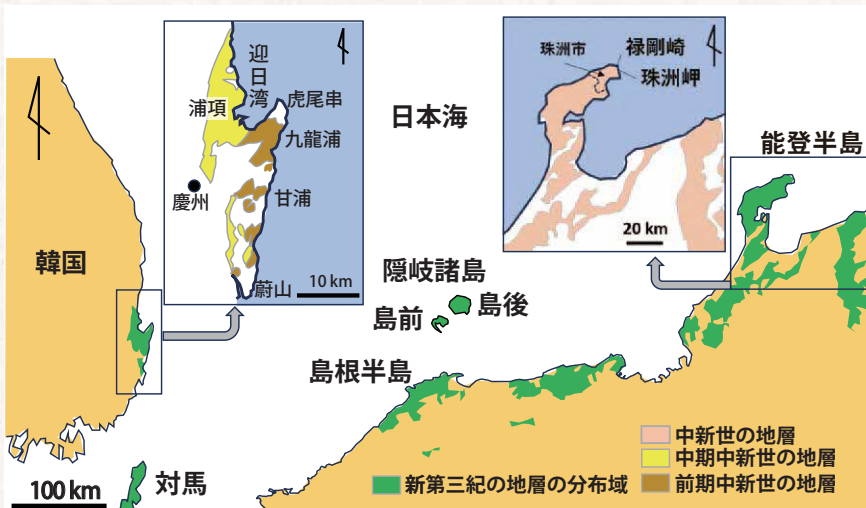


図8. 西南日本の日本海沿岸域と韓国東岸における新第三紀の地層の分布と引き裂いたと考えられる場所の地質

山や甘浦（ガンボ）がある。

能登半島の北は北東-南西方向に73kmにもわたって地塊が広がっており、珠洲岬や禄剛崎はその北東端に位置する。珠洲の地形的位置づけは島根半島の美保関に等しい。地質で見ると、能登半島の北岸は中新世初期から後期の火山岩や堆積岩が分布し、急崖を形成しているところが多い。これらの岩石は中新世という時代の中では島根半島とも共通している（図8）。

「北門の佐伎の国」と「北方の良波の国」には、なぜか「埼」のような切り裂いた場所が特定できそうな地理的表記がないため、具体的な比較ができない。ここでは多くの古代史研究者に倣って、前者を隠岐の島前（どうぜん）、後者を島後（どうご）としてみると、島前は新第三紀後期の火山岩よりなり、島後は古第三紀から新第三紀、さらに中生代前期に形成された片麻岩（へんまがん）（隠岐）など多様な地質構成でできているという大きなくくりになってしまう。

■土地を引っ張った綱の地質

折絶とともに、神話のキーワードには国を引いた綱がある。風土記時代には綱となる陸地はどうなっていたのであろうか。縄文海進と呼ばれる約7000年前の海面水位が高かった時には島根半島の南に広がる低地帯は、奥の深い内湾状態であった。しかし、縄文海進以降、西は斐伊川や神戸川から供給される土砂によって急激に埋め立てられ、東は日野川によって大量の土砂の流出が続いた。前者は

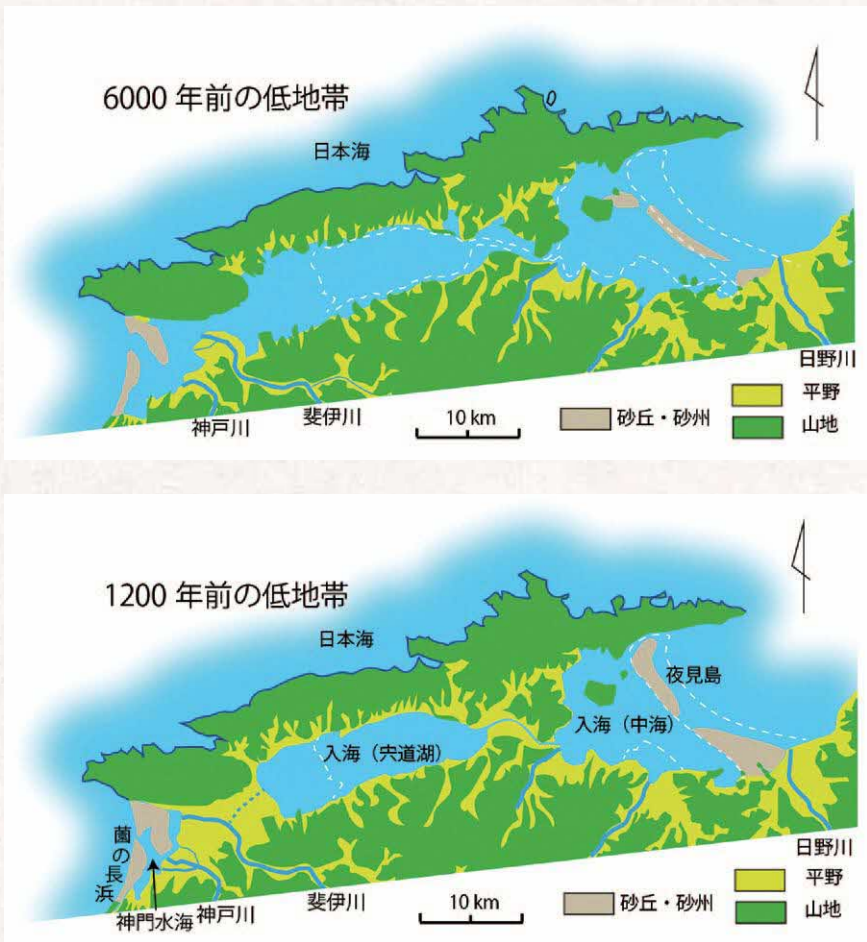


図9. 6000年前と1200年前の島根半島と本土との間の低地帯の変化（松江市政による）

地質学からみた『くじびき神話』

出雲平野へと姿を変えていく。奈良時代には、出雲平野西部に残っていた「神門水海（かんだのみずうみ）」は、土砂が供給され続けることでますますその形が小さくなっていった（図9）。弓ヶ浜半島は日野川から流出した土砂が、沿岸流で運ばれ細長く発達した砂州に成長していく。しかし、夜見島（よみしま）との間にはまだ切れ込まれたような水路が残っていた。国引き神話では夜見島といっているが、全体的としてみると現在の弓ヶ浜半島に重なる地形をしていたとみてよい。

■古代史にみる主な国引き神話の解釈

出雲国風土記は、古事記や日本書記とならんで古代国家や地誌の考証資料として多様な解釈がなされてきた。ここでは次の3つの視点を取りあげ、以降の議論につなげたい。

- (1)国引きの詞は、知識人の手になるもので、国引きの思想は、土地の広さを重視する農耕の人によって伝承された。耕作すべき土地の拡大を祝う祭儀の詞章であった（武田1953）。
- (2)国引きの民間伝承をモチーフにした国造の統治領域の形成の物語であり、国造の存在と支配を基盤にして成立した（石母田1957）。関（1984）も島根半島にあった4つの政治的社会的統合に国土の形成の政治的意味があったと国造りの視点で指摘する。平野（2016）は、国引き神話が国庁のあった意宇郡のなかで語られていることを重視し、そこで出雲国の政治を行うための権威付けと説明する。
- (3)異域との海上交通権も握りながら力強くすすんだ国造りのあとを、古代出雲の人々が語りついだもの（門脇1976）。

このように3点の主張は異なっているようにみえるが、国引き神話の根底にあるのは地域で暮らす人々の視点と出雲という国の統治者の視点が密接に組み込まれていることでは共通している。これまでの説明で国引き神話にある折絶、綱、三埼といったキーワードは地質地形と関連していることが理解できた。言い方を変えれば、これらは地域の人々が日常の生活のなかで気づいた自然景観の不思議さを何かたたとえて伝えたくなるような場所であったように思われる。やがて人々のコミュニケーションを通じて物語化されていったのだろう。いわゆる民間伝承がこの神話の原点となっている。

■環日本海交流がもたらした日本海の地理的広がり

この国引き神話には、地理と地形について鋭い感覚が反映されているものとみるべきで、島根半島の西端は「新羅の三埼」であり、東端は「高志の三埼」でなければならなかったと考えたい。そして、出雲の国造りを語るうえで国力のあるこれらの国の名を使うことは、出雲国の権威をいっそう高める効果があったであろう。その点「北門の佐伎の国」と「北門の良波の国」は、やや機械的ではあるが島根半島の残る2つの地塊である「狭田の国」や「閩見国」と対応させるためのもので、新羅や高志とは異なる意味で使われていたように思われる。島根半島においても火山岩類が分布しているので、岩石の構成は似ているとしても、島根半島の「狭田の国」や「閩見国」との地形の比較には共通する地形的特徴がないため国という全体像を使って表現したのだろう。そのようにみると、4つの国を引く物語を完成させるためには、新羅と高志の間の中間的な所にある島にも目を向けざるを得なかった。明らかに国引きの発想の元には、古代の人々の日本海における地理的な位置関係が理解され、雁行配列した4つの地塊と合理的に適合させたといえる。

平野（2016）も指摘するように環日本海交流説は、上記のような視点で捉えると理解しやすい。古代からの環日本海交流にとって出雲は主要な場所であったことが出土品や古墳などで明らかにされている。

■発想の原点から国作り構想へ

民間伝承を国作り構想に活かす重要な役割をはたしたのは語部（かたりべ）であった（図10）。古事記や他の風土記においても古老の伝えとして登場する。一般に、語部は宮中に仕える専属の伝承者のイメージがあるが、倉野（1964）によると、平安時代以前はほとんどが普通の農民であったとされ、さらに上田（1960）は彼らが農業を行いながらも国造の支配理念の元で地域社会の伝承を行う役割を担ってきたと指摘している。石母田（1957）は、国引きの詞章が宗教的な儀礼のなかで作られ伝承されたものだから、出雲の語部は国の政治と密接に結びついた国造等の支配者たちに奉仕するための制度であったと考えている。そのため、民衆のなかにある叙事詩や物語を自由に語部が語り、伝承したという

ような民俗学的な見解は支持できないという。しかし、そのような制度的なものがあつたとしても、この国引きの発想の基本は島根半島を日常的に見ている民衆のなかに芽生えたものであることを優先して考える必要がある。すなわち、民衆の感性豊かな自然景観への発想が国の支配層が考える国造りの発想の中に組み込まれ、文学的・儀式的な詞章へと合理的に磨き上げられたとみるべきであろう。

地図のない時代、古代の人びとの移動において、地形を読み取る技術がより重要であったとしたら、国引き神話に地形の重要性を入れて解釈しても無理はない。そこには、朝鮮半島や北陸（高志の国）の人々との交流を通して知り得た海岸地形の類似性に加えて、地質学的に形成された島根半島の特異な稜線の途絶え、すなわち折絶があつた。国引き神話は、類似の地質構成と地形が大陸移動説のような「土地の水平移動」を発想させ、そして国造りの物語へと集約させた古代出雲の農民・漁民・語部・国造・国司にいたる階層を超えた人々の合作であつたと理解したい。



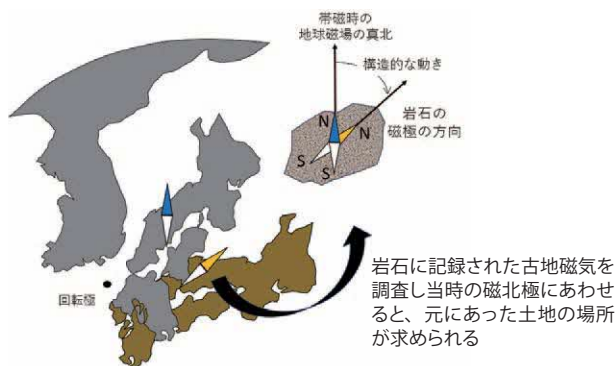
図10. 出雲国意宇郡の語部
語臣猪麻呂（かたりのおみいまる）像
（安来市安来町）

■時空をつなぐ人々の自然観

寺田寅彦（1933）は、神話を自然科学と結びつけた最初の人であり、一般市民に向けて、その面白さを語っている。「神話と地球物理学」というエッセイでは、出雲国風土記にある神様が陸地の一片を綱で引き寄せるこの様子をウェゲナーの大陸移動説にたとえている。当時は、もちろんのこと古地磁気学的証拠は皆無であり、単なる随筆と言えばそれまでかもしれない。しかし、当時得られた陸域ばかりでなく海底地形を克明に読み取っている寺田の視点（たとえば、東京大学地震研究所彙報、第12号、1934年）は、現在の地球科学にも反映されている。このことからみても、自然を見る目は、理論的説明の程度は別にして、時間を超えて人々の中に宿っていることを考えさせる。

日本列島の動的形成の復元

岩石には磁性鉱物が含まれていることが多い。火山岩は高温のマグマが冷えて固まるときに地球の磁場である地磁気を磁性鉱物が記録する。これを熱残留磁化といい、岩石の残留磁気を使って過去の地磁気を研究する学問を古地磁気学と呼んでいる。火山岩の残留磁気を測定すれば、それぞれの場所の磁極の方向（磁北極と磁南極）が求められるので、もし岩石の磁極が岩石のできた時代の磁極と異なれば、その岩石は帯磁した後でなんらかの動きがあったとみなされる。したがって、年代ごとに、また地域を変えて岩石の磁極を測定することで、土地の構造的な動きを復元することが可能になる。



日本海拡大説は日本列島の古地磁気の復元によって導かれた。西南日本弧の時計回り回転と東北日本弧の反時計方向の回転運動によって日本列島が大陸から分離することで背弧である日本海が拡大していった、とする。

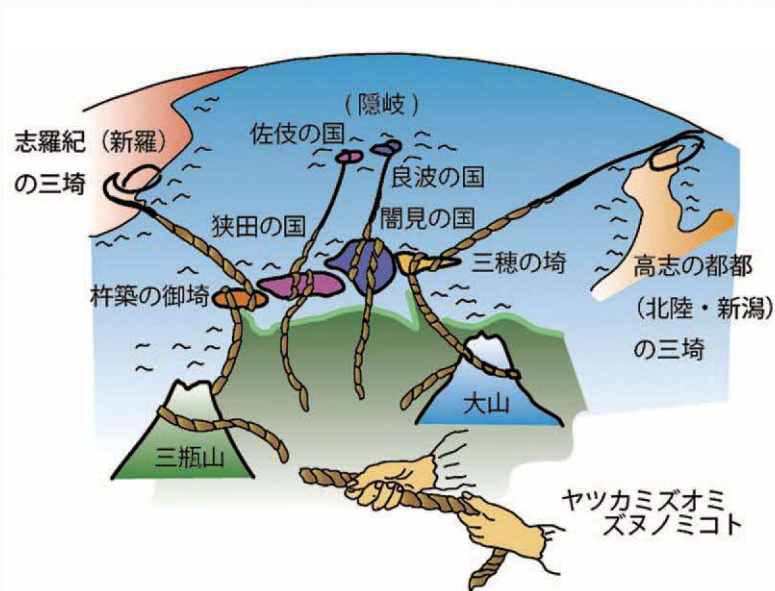


岩石に付いた磁石

出雲国風土記意宇郡の国引き神話 (詞章)

意宇(おう)と名付けるわけは、国引きをなさった八束水臣津野命(やつかみずおみづぬのみこと)がおっしゃられるには、「八雲立つ出雲国は、幅の狭い布のような幼い国であるよ。初めの国を小さく作ったな。それでは、作って縫いつけることにしよう。」とおっしゃられて、「志羅紀の三埼(しらきみさき)を、国の余りがありはしないかと見れば、国の余りがある。」とおっしゃられて

《童女(おとめ)の胸のような鋤(すき)を手に取られ、大魚の鰓(えら)を衝くように土地を断ち切り、割き離して、三本縫(よ)りの強い綱(つな)を掛け、霜枯れた黒葛(くろくず)を練(く)るように、手練(たぐ)り寄せ手練り寄せ、河船を引くようにそろりそろりと》



「国来（くにこ）、国来」と引いて来て縫いつけた国は、去豆（こづ）の折絶（おりたえ）から八穂米支豆支（やほしねきづぎ）の御埼（みさき）である。そしてこの国を繋（つな）ぎ固めるために立てた杭（くい）は、石見国と出雲国との堺にある佐比売（さひめ）山がこれである。またその引いた綱は藺（その）の長浜がこれである。

また、「北門（きたど）の佐伎（さき）の国を、国の余りがありはしないかと思えば、国の余りがある。」とおっしゃられて、《同上》「国来、国来」と引いて来て縫いつけた国は、多久（たく）の折絶から狭田（さだ）の国がこれである。

また、「北門の良波（よなみ）の国を、国の余りありはしないかと思えば、国の余りがある。」とおっしゃられて、《同上》「国来、国来」と引いて来て縫いつけた国は、宇波（うなみ）折絶から闇見（くらみ）国がこれである。

また、「高志（こし）の都都（つつ）の三埼（みさき）を、国の余りがありはしないかと思えば国の余りがある。」とおっしゃられて、《同上》「国来、国来」と引いて来て縫いつけた国は、三穂（みほ）の埼である。持って引いた綱は夜見島（よみしま）、繋ぎ固めるために立てた杭は、伯耆（ははき）国の火神岳（ひのかみのたけ）がこれである。

「今は国引きを終わった。」とおっしゃられて、意宇杜（おうのもり）に杖を突き立て、「おえ（＝意宇）」とおっしゃられた。それで、意宇という。

（解説 出雲国風土記、島根県古代文化センター編2014）

〔主な参考文献〕

- 石母田正 「古代文学成立の一過程－「出雲風土記」所収「国引き」の詞章の分析」
文学、25巻4・5号 1957（「神話と文学」岩波現代文庫 2000）
- 上田正昭 「語部の機能と実態」 歴史における芸術と社会 みすず書房1960
- 門脇禎二 「出雲の古代史」NHKブックス 1976（「古代出雲」講談社学術文庫
2003）
- 倉野憲司 「語部と古事記・風土記」 国文学 解釈と鑑賞1964
- 島根県古代文化センター編 「解説 出雲国風土記」今井書店 2014
- 関 和彦 「国引詞章の原形」 月刊歴史手帳12巻12号 1984
- 武田祐吉 「国引きの詞の考」 出雲国風土記の研究 1953
- 地質図表示システム 地質図ナビ 5万分の1 地質図幅 (<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>)、2024年4月1日参照
- 寺田寅彦 「神話と地球物理学」 文学1巻 1933
- 野村律夫 「神が土地を引っ張ってきた 国引き神話と島根半島」 大地と人の物語
創元社 2024
- 平野芳英 「古代出雲を歩く」 岩波書店 2016
- 松江市史 資料編1 自然環境 附録 2019

ヒストリー作成体制

- 事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、文化財課
- 執筆：野村律夫
- 編集：文化スポーツ部、丹羽野裕が松江市文化財保存活用計画協議会および事務局内で協議をして編集した。

松江のヒストリー集 5

『出雲国風土記』と松江のヒストリー【コラム集】

コラム1 地質学からみた『くにびき神話』

令和8年(2026)3月30日

松江市文化スポーツ部 松江城・史料調査課

